

## ワークショップ 「おいしいチョコレートの真実」

平成28年7月8日、山梨大学の1年生対象の全学共通教育科目「消費生活論」において、認定NPO法人ACE（エース）から講師を招聘し、ワークショップを開催した。

ACEとは、Action against Child Exploitationの頭文字をとったものであり、世界の子どもを児童労働から守る国際協力NGOである。ACEの田柳優子さん、杉山綾香さんが「チョコっと世界をのぞいてみよう！体験ワークショップ『おいしいチョコレートの真実』」を約60分行き、授業担当者の神山久美准教授と連携した授業を実施した。

最初に、ACE設立のきっかけ（1997年に学生5人で設立）と活動内容、本日のテーマに関わるクイズを行い、世界の児童労働人数が1億6800万人（世界の子供の9人に1人）であり、身近なさまざまなものが児童労働によって作られていること、特にアフリカでは子どもの5人に1人が児童労働をしており、貧困、紛争、エイズなどが深刻であるという現状の説明があった。

### <ワークショップ>

学生は5~6人のグループに分かれて、カカオの収穫とチョコレートの製造に関わるガーナの家族と日本の家族の生活を体験するワークショップを行った。

#### 1. シーズン1

各グループに「家族紹介シート」、「お買い物シート」、「お買い物カード」が配布された。「お買い物シート」には、各家族の収入や「必ずかかるお金」、「使えるお金」が書かれている。「使えるお金」の範囲内で家族が生活していくために何が必要か話し合い、「お買い物カード」に書かれた商品やサービスを購入していく。

例えばヤボエ家はガーナの小さなカカオ農家で、父・母・子ども3人の5人家族。収入43から、家賃（5）、食料（3）、教育（4）など「必ずかかるお金」27を引いた残りのお金22を、どのように使うか決める。ある班の学生らは、古着（5）、肉や魚（5）を選び、残ったお金は貯金に回していた。

6種類の家族は、次のような設定となっている。

マハマ家（ガーナ）：農園労働者、収入8

メーヌ家（ガーナ）：小さなカカオ農家、組合不参加、収入37

ヤボエ家（ガーナ）：小さなカカオ農家、カカオ生産組合に参加、収入43

アナン家（ガーナ）：カカオ農園経営、政府機関所属、収入200

佐藤家（日本）：製菓工場長、収入230

高橋家（日本）：製菓工場社長、収入300

～の各家族がどのような買い物をしたのか、その結果を学生に発表してもらい、それぞれの家族の経済状況を共有した。

#### 2. シーズン2

シーズン 2 では、次のカカオの収穫期に好天に恵まれ、世界中でカカオが豊作になったという設定で行った。カカオが豊作で市場の供給量が増えると、カカオの生産者価格が下がる。日本の製菓工場は原料が安く手に入ることになり、収入が増えた。しかし、ガーナの農家の収入は激減し生活状況が悪化、子どもが学校に通えなくなり児童労働を生み出すことにつながっていく。同じガーナの農家でも、組合の参加・不参加により収入に差が出た。シーズン 2 では、このようにカカオの価格変動による生活への影響を体験することになった。各家庭の変化した生活状況を発表し合い、感じたこと、考えたことを皆で共有した。

学生は、実際におこりうるガーナの家族モデルを、日本の家族モデルと比較することができ、多様な視点からさまざまな問題を考えることができた。まとめとして DVD を視聴し、カカオ生産の様子や児童労働の背景、その解決への取り組みを実際の映像を通して理解した。

学生には、ワークショップを体験した感想や日本の私たちに何ができるかについて授業の最後に記述してもらった。以下は、学生の記述である。有意義な体験となったことが伺えた。

#### < 学生の記述(抜粋) >

・日本に暮らしていると、身の回りの商品がどのように生産されているのか、意識する機会は少ない。手軽に買うことができる甘いチョコレートの苦い現実を知ることができた。子どもの過酷な労働で商品が生産されていることに驚いた。

・話を聞くだけでなく、実際にワークショップをしてみて、カカオ農家の貧困家庭の実情がほんの少しだが分かった。現地の人々がどれだけ働いても貧困から抜け出せないこと、わずかな収入もカカオの価格に左右されていることなどが分かった。今まではフェアトレードマークのついた商品を意識することはなかったが、これからは意識して選択していきたい。

・今日のワークショップで、日本側の家族、ガーナ側の家族といろいろな立場になって考えたが、とても複雑で深刻な社会問題であると痛感した。児童労働を行っていない企業の商品を選びたい。私たちはその企業の商品を買うことでその企業にお金の投票をしていることになるので、消費者として責任のある買い物をしていきたい。

・なぜ児童労働がおきなのか、その背景が理解できた。安い価格の商品を求めた先進国のしわ寄せが、開発途上国にきていることがわかった。日本の消費者として、生産地のことまで知って商品を選択したり、公正な貿易（フェアトレード）を促していくことが大切である。

・私たち消費者にできることは、こういう児童労働が行われている現実を知り、エシカル消費について興味を持ち、選択できる状況ではフェアトレードなどの商品を選ぶことである。また児童労働を行っている企業は止めさせ、世界全体が「児童労働にレッドカード！」の意識に向かえるとよいと思った。

・先進国と開発途上国の差を、ワークショップをすることで実感することができた。劣悪な労働環境のため、明日生きていくためのお金が入るか否かのぎりぎりのラインで生活をしており、子どもにまで労働をさせている。日本などの先進国の企業が、公正な立場で児童労働がおきないように監視をする体制をつくっていくのが解決の 1 つになる。自分の働く企業も、公正な取引を実施している企業を選びたい。